

坂本堤弁護士思い出

法律事務所職員

宮脇 秀行

私が入所した時期に、オウムに殺害された坂本堤弁護士が司法修習生として事務所に配属されてきた。当時、事務所ではひったくりの冤罪事件を扱っており、私は守る会の活動を通じて触れ合う機会が多かった。

休日もアリバイ証人さがし 一修習生の立場と思えぬ熱意に驚き

事件は、障害のある青年が自転車で抜き去りながら買物籠からバックをひったくったというものである。後日、自転車に乗って引ったくりができるか実験をしたとき、何度か失敗を繰り返したあとにかろうじて成功し、嬉しそうに「できたよー」と言う、そんな青年に自白を強要したものであった。青年は坂本さんのことを（弁護士の）タマゴと呼んで慕っていた。

私が驚いたのは坂本さんの事件にかける熱意だった。担当している弁護士ならもちろんであるが、支援の学生のアパートで語り明かし、青年をヒーロー扱いにして事件後の彼のことを考えたことがあるかという指摘に「一生かわりあっていく」と宣言したり、また、休日を利用してのアリバイ証人さがしへの出張等、一修習生の立場だとは思えないほど熱い人であった。

本気で怒り、真摯に取り組む 「弁護士の原点はこれなんだ」

社会的にも最も弱い、障害のため充分反論できない青年に罪を押し付けようとする警察・検察の行為に、本気で怒り、己を惜しまず真摯に取り組む姿に感銘を受けた。もちろん、弁護団の熱意と情熱は当然のことながら本物であったが、坂本さんと接して、弁護士を志す人はこ

んなに熱い心を持っていたのかと驚き、この人と一緒に仕事をしていきたいと思った。

また同時に、事務所の弁護士の原点はこれなんだ、みんなこのような思いで事件に取り組んでいるのか、とあらためて感じたのだ。

自分の仕事のひとつひとつが 弁護士を支えているという誇り

法律事務所に勤務して20年になる。今では、弁護士17名、事務員9名、合計26名の規模の法律事務所となった。自分よりも若い弁護士が多くなり、多種多様な事件を扱うなかで忙しく仕事に追われる日々が続いている。

あらためて感じるのは、若い弁護士たちもまた同様に熱い心で頑張っているんだということである。薬害、ハンセン、残留孤児等の社会的な事件だけでなく、一般の事件を通じて、単に勝利を得るだけでなく、家庭、職場、地域の問題等、今後、彼がどのように生きてゆくのかを含め、事件を解決していこうと努力を重ねる。このような弁護士たちに刺激を受けつつ、働きつつけられることは幸せだと思う。

今では弁護士と一緒に活動するということは少なくなってきており、山のような仕事に埋没しがちだが、自分の仕事のひとつひとつがこうした弁護士の活動を支えているのだということを、折りに触れて思い出し誇りをもって弁護士をサポートできるようにしていきたいと思う。